

目次

- ・ 保育園でビオトープ観察会…… 1
- ・ 共働舎とんぼガーデン…… 2
- ・ 雲を見よう 土で絵を描こう…… 2
- ・ 野草を種から育ててみよう…… 3
- ・ 田んぼから…… 4
- ・ 何でも確かめよう…… 4
- ・ コーヒーとともにページをめくるひととき… 3

★保育園でビオトープ観察会★10月25日(土)、横浜市のかさまの杜保育園でビオトープの親子観察会が開催され、講師を担当しました。この夏、園庭にある流れと池のビオトープの改修を担当させていただき、今度は園に通う子どもたち親子を中心に、ビオトープへの関心を高め、親しんでもらおうということで催されました。

集まった親子は30人！口で四の五の言う前に、とにかく



ビオトープにふれでもらおうと、早速手に手に大小の網を持ってビオトープへ一目散！子どもよりも熱中しているお母さんやお父さんもいましたよ。さてさて、どんな生きものがいたのかな？ヤゴ(トンボの幼虫)がたくさんと、そのほかにはヒメゲンゴロウもいて、これには園長先生が大感激！たらいに入れて触ってみたり、ヤゴの下あごをびよ～んと伸ばして(これでエサを捕るの

だ!)みたり、虫眼鏡や顕微鏡で大きなヤゴの毛の1本1本や渦巻き模様の目玉にキッと驚いたり、子どももおとなもあちこちで歓声を上げました。

ここで「トンボの紙芝居」。シオカラトンボやギンヤンマ

など4種類のトンボを取り上げながら、それぞれ好きな環境があるので、いろいろな環境があれば、いろいろなトンボと一緒に仲良く暮らしていけるね、という主旨を物語風にして話しました。

実際にこの日見つけたヤゴはシオカラトンボ・オオシオカラトンボ・ウスバキトンボ・イトトンボの仲間、の4種類。この結果から、どんな環境があつてどんな環境が足りないのかが見えてきます。それは今後の維持管理に活かされます。

終盤、トンボのペプサートがビオトープを飛び回り、すみわけの様子を実演。子どもたちが沸きます。

最後に「横浜メダカの会」の方にバトンを渡し、同じ水系の「矢部メダカ」を子どもたちが放流しました。これにより、今や絶滅の危機に瀕する地域在来のメダカを保存する、という大切な役割もこのビオトープに加わりました。

多くの人の協力でここまでできたビオトープ。たとえば、園の緑地を管理している石井造園さんには、ビオトープのために薬剤散布を控えていただくなどの有難いご配慮をいただいています。これからも、ビオトープを通して

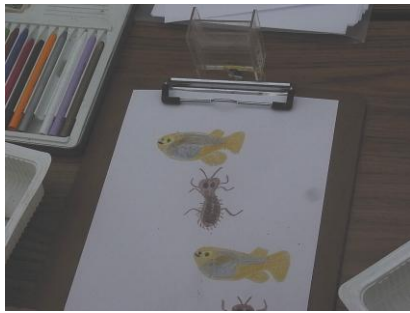


生きものも人もつながっていけるといいな、と思っています。☆かさまの杜保育園のビオトープ事業は、人と自然の研究所・三森典彰氏・私の3者で協働展開しています☆

★共働舎とんぼガーデン★9月から11月にかけて共働舎のとんぼガーデン(ビオトープ)では①共働舎を利用している方との自然ふれあい体験(1回)②地域の方々が参加する「とんぼガーデン観察隊」のワークショップ(1回)が開催されました。

①では、今年度3回に渡り、おもに五感を使ってとんぼガーデンや職場の身近な自然とふれあうことをねらいに計画し、10月10日が最終回でした。

この日もいつものように<フィールドビンゴ>をやって自然とふれあう感覚を高めていくと同時に、「とんぼガーデンの様子や生きものを絵に描いてみよう」を実施しました。これは、とんぼガーデンへの親しみの気持ちをよりいっそう高めるためのアプローチでした。



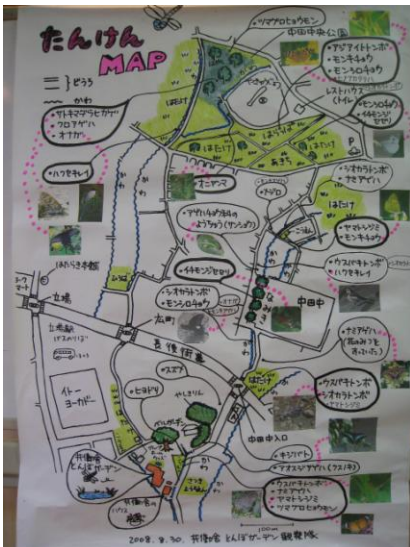
ヤゴやメダカの絵を描く人、とんぼガーデン全体の様子を描く人、木や花を描く人、イメージを広げてさまざまな色を自由に描

いていく人、など一人一人の個性が絵によく表れていて、とても自由な感じがしました。私も楽しくなりました。

観察会としては今年度はこれで終わりですが、これからも共働舎のみなさんが、お仕事の合間などに「とんぼガーデン」に足を運んでほっとできる場になってほしいなと願っています。

②では、前回8月末に行った地域の自然観察のまとめをまずやりました。

みんなで観察した生きものを模造紙大に拡大した地図に書き込んだもの(写真)を眺めながら、どんな環境(明るい・暗い・草原・森・水辺など)にどんな生きものがいたのかを確かめていきました。



その結果、共働舎の周りにはこれらの場所を好む生きものがいたことから、宅地化が進んでいるとはいえ、まだ複数の環境に恵まれていることがわかりました。

また、とんぼガーデンでも同じ生きものが見られたことから、これらの生きものが産卵、エサ捕りなどで行き来をしているのだらうということも見えてきました。

参加者の皆さんは、自分の家の周りなどでも同じように生きもの観察をする「宿題」もしてきていたので、とんぼガーデン～周りの自然～自分の家の周り自然…というように、「ビオトープ」を単体の施設と見るのではなく、周りの自然環境とつながった場所であるということを感じ取る活動になりました。



外での活動では、ドングリや野草の種まきをしました。もちろん、とんぼガーデンの周辺で採取したものです。そして、

サンカクイやカンガレイ、1株だけある稲の刈り取りもし(写真上)、干して藁として活用することにしました。

ところで、今年度の活動の1つに「赤とんぼやいととんぼがもっとすみやすい場所にしよう」という作業があり、みんなで取り組んできましたが、夏から秋にかけてそれらの飛来が見られました(写真右はリスアカネの雄)。果たして卵を産んでくれているのでしょうか？ヤゴが生まれるのでしょうか？



赤とんぼは卵のままで冬越しをするので、来年の春に確かめてみたいと思います。それまで楽しみに…。

☆共働舎のビオトープ事業は、人と自然の研究所・三森典彰氏・私の3者で協働展開しています☆

★雲を見よう 土で絵を描こう★仕事柄、自然体験のアプローチ方法の引き出しを増やす努力を常日頃しています。

9月のある日、青く透き通った空に白い雲がぼっかりと浮かんでいたので、共働舎の自然観察クラブで「雲」をテーマにした活動を試みました。

7人で屋上に上がってみんなでひとしきり空を眺めたあと、男の子が雲でいろんな動物をこしらえて遊ぶ絵本

『くもさんとあそぼう』を読み聞かせしました。こうして雲への想像力をかきたて、その後おもむろに B5 判の白いカードを一人一人に配りました。今度は、自分の好きな雲を選んでカードに描いていきます。集中してよく見ながら描く人、イメージを広げながら描く人、など一人一人違ったやり方で楽しんでいました。

またある時は、土で絵の具を作り、画用紙に絵を描いてみました。この「土で絵の具」は時々見かける手法です。私は、絵の具作りの前に自然の中での土以外の虫やにおいや手触りや鳥の声などの「発見」を楽しむことで五感をウォーミングアップしてから、土の色



のわずかな違いなどに気づきながらそれぞれ土を採取するようにしました。

土の絵の具だと、普段より大胆になるのでしょうか。B4判の画用紙ではみな窮屈そうで、次にやる時にはもっと大きな画用紙を用意なくては、と思いました。この写真の絵は参加者の方が描いたつくしの絵です。大地からつくしがグンと伸びる様子がとてもよく表れていると思います。

ほかにもやってみたいのは、風や風車をテーマにした活動や石や土と地球の誕生とのかかわりをテーマにした活動です。

★野草を種から育ててみよう★家の庭やベランダで園芸を楽しんでいる方は多いと思います。

そこで提案！ 買ってきた種や球根、苗だけではなく、**野草を種から育てる**、をやってみませんか。

家の近所に生えている野の草花で「きれいだなー」と思っている草があるなら、その花が実を結ぶころを逃さないようにしましょう。「へえーこんな種がつくんだ」と驚きながら熟したところを少し、チョイチョイいただきます。そしてそれをプランターや植木鉢に撒いたり、庭に直播きしたりします。

種は採ったら、すぐに蒔きましょう。それが自然界でも同じ姿だからです。そうしないと、うまく芽生えないことがあります。なぜなら、種は冬の寒さに当たったり、夏の暑さに当たったりすることで目覚める性質を持ったものが多いからです。

たとえば、夏から秋に咲いて晩秋から冬に種をこぼす植物があります。これらの植物の多くは、すぐに芽生えたと冬の寒さに耐えられないので、冬の間は種のまま寒さを忍び、春暖かくなったら芽生える性質があります。だから、蒔いてすぐに芽が出なくても焦らないでね。



ツククサの種



ツククサの芽生え



咲きました！

コーヒーとともにページをめくるひととき…その6 川端康成「一草一花」講談社文芸文庫、1991

私は、中学2年の国語の教科書の一番最初に掲載されていた川端康成のエッセイをもう一度読みたいとずっと思っていました。ネットで調べ、図書館の司書さんにも協力してもらい、教科書の発行元の光村図書にも問い合わせ、そうしてようやくわかったのが、「美の存在と発見」というハワイ大学の講演録の冒頭部分が、私がずっと読みたかったエッセイだということ、教科書での題名は「朝の光の中で」だったこと、そして現在手に入る掲載書が、この文庫本だということでした★ついにたどりついた時にはもう感動で胸が高鳴りました！光村図書の方は、当時の教科書の表紙も含めたコピーを送っていただきました★内容は、ハワイのカハラヒルトンホテルの食堂に並べてあるコップの群れに朝の光がさす、その美しさとそれを感じる自分の心持ちを表現し、こうした出会いこそが「一期一会」であるとしめくられるもので、私は一期一会という言葉がこの時初めて学んだのでした。以来、一期一会と聞くとこのエッセイを思い出し、私の脳裏にも朝日にキラキラと輝くガラスのコップの群れがありありと浮かぶのです★そして、このエッセイへの思い出はもう1つありまして、高1の時に、部活のK先輩と「コップと言えばどんなコップを思い浮かべるか？」という他愛もない占い話をしていた時に、3年生のS先輩は即座に「それはカハラヒルトンホテルのコップでしょう！」と言ってニヤッと笑ったのでした。その場にいたK先輩も私もすぐにそれがどういう意味かわかり、「あっ！」と言って顔を見合わせて笑ったものでした★それにしても、国語の教科書は優れた読本ですね！

私はツユクサの鮮やかな青い色が大好きで、その種をプランターに蒔いてみたことがあります。よく育ちましたよ！ベランダでも好きな野の花を楽しめるのは心が浮き立ちますね。

ただし、注意してほしいのは、**近所で種を採ること、外来種の種をわざわざ蒔いて繁殖を助けない**、ということです。遠い場所の植物を人間の手で移動させ、持ち込むことは、土地固有の生態系を守る為に慎まなくてはなりません。自宅と同じ水系や流域のできるだけ近い所という範囲も1つの目安になりますが、ここでは「普段自分が普通に歩く近所の範囲」というのがわかりやすいと思います。

また、これが外来種なのかそうでないのかの判別が難しい場合もありますので、育ててみようと思う植物は、一度図鑑で調べておくことをお勧めします。身近な外来種は繁殖力が強く、もともとあった日本の植物を追いやってしまうことが多々あるので、気をつける必要があります。例としては、セイウタンポポ(左)やセイタカアワダチソウ(右)などがあります。



ここが反り返るのが外来種のタンポポ



★田んぼから★秋は稲刈りです。稲刈りが済んだ田んぼは、鍬で耕す場合(秋の荒起こし)と春までそのままにしておく場合と二通りありますが、この秋の荒起こしが果たして本当に必要なのか?と考えています。荒起こしの効用としては、雑草が生えにくくなる、土が空

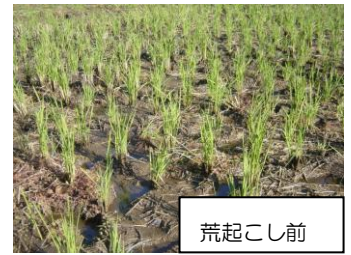
〇〇**つぶやき**〇〇春に種を蒔いたゴーヤはやっぱり実らずに枯れてしまいました。やはり南国の植物なので、芽生えをもう少し早くする工夫がひつようだったのかな。

★自己紹介★私は、里山を生かした公園のスタッフとして自然の保全やイベントの運営に携わる一方、「あおぞら自然共育舎」として、フリーランスで自然体験・再生・創出のための仕事をしています。「気づき」を大切にすることが信条。最近ではビオトープ関連の仕事も増えてきました★この通信で自然のことや私がやっていること、日常で自然とのふれあいを楽しむヒントのようなこともお伝えできたらなあと思います、私が会った方や知っている方にお渡ししています。ご家族やお友達との回し読み歓迎です☆ネイチャーゲームインストラクター・ビオトープ管理士・有)カルティベイトカンパニー 人と自然の研究所客員研究員☆横浜市戸塚区在住、1963年6月生まれ。



*仕事の相談、感想はこちらまでお気軽に!→hiromi-h@river.dti.ne.jp 早川広美 (あおぞら自然共育舎)

気に触れて殺菌される、害虫が減る、などがありますが、この「害虫が減る」で、特に気になっているのがイナゴです。私が作業をしている田んぼはイナゴがあまりいません。イナゴは秋に田んぼの畦や稲株に卵を産むので、秋の荒起こしはイナゴにとってはダメージではないかと疑っているのです。



もう1つ、赤とんぼのアキアカネも稲刈り後の田んぼの水溜りなどによく産卵しますが、これも耕した時のダメージはどうなんだろう?と思います。ただ、こちらは春に水が入ってかき混ぜられれば OK なのかもしれませんが、よくわかりません。イナゴにしてもアキアカネにしても何か検証ができないかと考え中です。今アキアカネの卵がどれくらい乾燥に耐えるのかベランダで実験していますが、それとからめても何かできるかも?

★それホント?!何でも確かめよう★ドングリを机の引き出しなどに入れておいたら白い芋虫が穴をあけて出てくるのに出くわした経験はきっと多くの方がお持ちでしょう。この芋虫はゾウムシやチョッキリという小さな虫の幼虫で、ドングリを食べて出てきたら土の中でさなぎになる、というのが定説です。ちょっと待った!それホント?というわけで只今実験中!出てきた芋虫を植木鉢の土の上に置いたらスタコラもぐりました。穴のあいたドングリを割ってみました。わかったこと①土にもぐってもすぐにさなぎになるわけではない②ドングリの中身を全部食べて出てくるわけではない。そこでもう1つ、穴のあいたドングリからも発芽するかどうか実験中だ～～!